

# 莊子郭象注 外篇第八 駢拇（後半）

水 野 厚 志

5

【本文】

且夫待鉤繩規矩而正者、是削其性<sup>①</sup>者也。待繩約膠漆而固者、是侵其德<sup>②</sup>者也。屈折禮樂、响俞仁義<sup>③</sup>、以慰天下之心者、此失其常然<sup>④</sup>也。天下有常然。常然者、曲者不以鉤、直者不以繩、圓者不以規、方者不以矩、附離不以膠漆、約束不以繆索。故天下誘然皆生而不知其所以生、同焉皆得而不知其所以得。故古今不二、不可虧也。則仁義又奚連連如膠漆繆索而遊乎道德之間爲哉。使天下惑也。

《訓讀》

且つ夫れ鉤繩規矩を待ちて正しき者は、是れ其の性を削る者なり。繩約膠漆を待ちて固き者は、是れ其の徳を侵す者なり。禮樂に屈折し、仁義に响俞して、以て天下の心を慰むる者は、此れ其の常然を失へるなり。天下に常然有り。

常然なる者は、曲れる者には以て鉤せず、直き者には以て繩せず、圓き者には以て規せず、方なる者には以て矩せず、附離せるには以て膠漆せず、約束せるには以て繆索せず。故に天下誘然として皆生じて其の生ずる所以を知らず、同焉として皆得て其の得る所以を知らず。故に古今二ならず、虧く可からざるなり。則ち仁義又奚ぞ連連たること膠漆繆索の如くにして道德の間に遊ばんや。天下をして惑はしむるなり。

《本文譯》

その上、そもそも曲がり尺・墨繩・コンパス・差し金によって正しくするのは、生まれつきの性を削ることである。繩ひもにかわ漆を使って固めるのは、自然な持ち前を傷つけることである。禮樂に體を折り曲げ、仁義に笑顔を見せて、そこで世の中の人々の心を慰めるのは、變わらない本性を失わせることである。世の中には變わらない本性がある。變わらない本性とは、曲っているのは曲がり尺を使う必要もなく、直つすぐなものは墨繩を使う必要もなく、圓いものはコンパスを使う必要もなく、四角いものは差し金を使う必要もなく、引っ付いたものはにかわ漆を使う必要もなく、引き締まったものは繩ひもを使う必要もない。

だから世の中では次から次へと萬物が生じてくるがその生じてくる譯はわからず、萬物が生じると同時に生を手に入れるがどうして得られるのかはわからない。だから變わらない本性は古今の區剛なく不變であり、損なうこととはできないのである。そうであれば仁義はさらにどうしてかわや漆・繩やひものように次から次へとくっついて道と徳の間に浮遊することがあろうか。世の中の人々の心を惑わせる存在なのである。

【語釋】

- (1) 鉤繩規矩 鉤は曲尺、繩は墨繩、規はコンパス、矩は差し金。

- (2) 性 『大東文化大學漢學會誌』第42號287頁「語釋」3を参照（以下『大東文化大學漢學會誌』の引用は、號數・頁數・項目數のみを記載する。また、特殊な例を除き、書名・人名に関しては、初出の語句のみを載せることとする）。
- (3) 繩約膠漆 繩はなわ、約はひも。膠はにかわ、漆はうるし。

- (4) 徳 第42號287-5

- (5) 屈折禮樂 無理に體を折り曲げて、恭しい態度で

臨む禮樂（【釋文】）。『莊子』「馬蹄」篇には「禮樂に屈折して、以て天下の形を匡す」とある。

- (6) 响命 表面だけを取り繕い、いかにも柔和そうな顔色をすること。

- (7) 仁義 第42號288-8

- (8) 常然 つねのさま。常に自然のままであるがままに任せる。

- (9) 連連 くっつき、連なるさま。繫續。連續（【釋文】）。『莊子』「馬蹄」篇に「萬物羣生し、その郷に連續す」とあるのと同じ。

【釋文】

「屈」崔本作誑。「折」之熱反。謂屈折支體爲禮樂也。「响」況於反、李況付反。本又作偃、於禹反。「命」音與、李音諭。本又作响、音詔。謂响諭顔色爲仁義之貌。

「纏」音墨。『廣雅』二云、索也。「索」悉各反。下同。

「連連」司馬云、謂連續仁義、遊道德間也。

「祇足」音支。「使喪」息浪反。下已喪同。

《訓讀》

「屈」は崔本は誑に作る。「折」は之熱の反。支體を屈折して禮樂を爲すを謂ふなり。「响」は況於の反、李は「況付

の反」と。本又偃に作る、於禹の反。「俞」は音與、李は「音諭」と。本又响に作る、音詡。顔色を响諭して仁義を爲すの貌を謂ふ。

「繹」は音墨。『廣雅』に云ふ、「索なり」と。「索」は悉各の反。下同じ。

「連連」は司馬云ふ、「仁義を連續し、道德の間に遊ぶを謂ふなり」と。

「祇足」は音支。「使喪」は息浪の反。下の「已喪」は同じ。

【注】

夫物有常然、任而不助、則泯然自得而不自覺也。

同物。故與物無二而常全。

任道而得、則抱朴獨往、連連假物、無爲其間也。

仁義連連、祇足以惑物、使喪其眞。

《訓讀》

夫れ物に常然有り、任せて助けざれば、則ち泯然として自得し、而して自覺せざるなり。

物に同ず。故に物と無二にして常に全し。

道に任せて得れば、則ち朴を抱きて獨り行き、連連として物に假りて、其の間に無爲なり。

仁義連連たるは、祇だ以て物を惑はし、其の眞を喪は

しむるに足るのみ。

【譯文】

そもそも萬物にはあるがままの姿がある。本性に任せて手助けしなれば、判然としないまま心に悟り、それを自覺することはないのである。

萬物に同化する。だから萬物と唯一無比であり、常に完全である。

道に任せて本性を手に入れるときには、生まれつきの素樸さを保持し、物欲に煩わされず獨行し、次々と萬物を借り物にするが、萬物と本性との間に存在するのは無爲である。

仁義は次から次へと、ただ萬物を惑わすだけならば、本來の姿を失わせるのに十分である。

【語釋】

(1) 泯然 はっきりしない様。滅びる様。

(2) 自得 第42號296—4

(3) 抱朴 生まれつきの素樸さを保持し、物欲に煩わ

されないこと。『老子』第十九章に「見素抱樸（素をあらは見して樸を抱く）」とある。また、『莊子』「馬蹄」篇

には「樸を残ひて以て器と爲す」とある。

## 【本文】

夫小惑易方、大惑易性。何以知其然邪。自虞氏<sup>①</sup>招仁義<sup>②</sup>以撓天下也、天下莫不奔命於仁義。是非以仁義易其性與。故嘗試論之、自三代以下者、天下莫不以物易其性矣。小人則以身殉利、士則以身殉名、大夫則以身殉家、聖人則以身殉天下。故此數子者、事業不同、名聲異號、其於傷性以身爲殉、一也。臧與穀、二人相與牧羊而亡其羊。問臧奚事、則挾筴讀書。問穀奚事、則博塞以遊。二人者、事業不同、其於亡羊均也。伯夷<sup>⑧</sup>死名於首陽之下、盜跖<sup>⑩</sup>死利於東陵之上。二人者、所死不同、其於殘生傷性均也。奚必伯夷之是而盜跖之非乎。天下盡殉也。彼其所殉仁義也、則俗謂之君子、其所殉貨財也、則俗謂之小人。其殉一也、則有君子焉、有小人焉。若其殘生損性、則盜跖亦伯夷已。又惡取君子小人於其間哉。

## 《訓讀》

夫れ小惑は方を易へ、大惑は性を易ふ。何を以て其の然るを知らんや。虞氏 仁義を招めて以て天下を撓せしより、天下 仁義に奔命せざる莫し。是れ仁義を以て其の性を易ふるに非ずや。故に嘗試みに之を論ずれば、三代より以下

は、天下物を以て其の性を易へざる莫し。小人は則ち身を以て利に殉じ、士は則ち身を以て名に殉じ、大夫は則ち身を以て家に殉じ、聖人は則ち身を以て天下に殉ず。故に此の數子は、事業同じからず、名聲號を異にするも、其の性を傷なひ身を以て殉と爲すに於いては、一なり。臧と穀は、二人相ひ與に牧羊して其の羊を亡へり。臧に奚を事とせしかと問へば、則ち筴を挾み書を讀めるなり。穀に奚を事とせしかと問へば、則ち博塞して以て遊べるなり。二人は、事業同じからざるも、其の羊を亡ふに於いては均しきなり。伯夷は名に首陽の下に死し、盜跖は利に東陵の上に死す。二人は、死する所同じからざるも、其の生を殘ひ性を傷つくるに於いては均しきなり。奚ぞ必ずしも伯夷の是にして盜跖の非ならんや。天下は盡く殉ずるなり。彼れ其の殉ずる所仁義ならば、則ち俗之を君子と謂ひ、其の殉ずる所貨財ならば、則ち俗之を小人と謂ふ。其の殉は一なるも、則ち君子有り、小人有り。其の生を殘ひ性を損ふが若きは、則ち盜跖も亦伯夷のみ。又惡くんぞ君子小人を其の間に取らんや。

## 《本文譯》

そもそも小さな戸惑いなら方向轉換で濟むが、大きな戸

惑いは生まれつきの性を變えてしまう。どうしてそれが分かるかという、舜が仁義をかかげて世の中の人々を混亂に陥れてから、世の中に仁義の使命のために奔走しないものはいないからである。これは仁義によって人々の本性を變えてしまったと言うことではないだろうか。そこで試しにこのことを論じてみると、夏殷周から後は、世の中に外物によって生まれつきの性を變えないものはいないのである。庶民は我が身を利益のために犠牲にし、士は我が身の名譽のために犠牲にし、大夫は我が身を家族のために犠牲にし、聖人は我が身を天下のために犠牲にしている。だからこれらの人々は、仕事の内容に差があり、受ける名譽も異なるが、生まれつきの性を傷つけ我が身を犠牲にしている点では、同じである。臧と穀は、二人とも羊の世話をしていて羊を逃がしてしまった。臧に何をしていたのかと問うと、卷物を小脇に抱えて讀書をしていたのであった。穀に何をしていたのかと問うと、ばくちを打って遊んでいたものであった。二人は、やっていたことには差があるが、羊を逃がしてしまった点では、同じである。伯夷は名譽を守るために首陽山のふもとで餓死し、盜跖は財利を追求するあまり東陵山の頂で死んだ。二人は、死んだ原因には差が

あるが、生命を犠牲にし生まれつきの性を傷つけた点では、同じである。どうして伯夷は正しく盜跖は間違っているか。決めつけられようか。世の中の人々はすべて何かのために生命を犠牲にしている。その人が犠牲にしているのが仁義であるならば、世間ではこれを君子と呼び、犠牲にしているのが貨財であるならば、世間ではこれを小人と呼ぶ。我が身を犠牲にしている点では、同じなのに、一方で君子が存在し、一方では小人が存在する。生命を犠牲にし生まれつきの性を損っているのは、盜跖も伯夷も變わらない。その上どうして君子小人の區別を二者の間に求める必要があるだろうか。

#### 【語釋】

(1) 虞氏 上古の聖王である舜帝(有虞氏)をさす。

(2) 招 俞樾は『國語』『周語』の「言を盡くすを好

みて以て人の過を招ぐ」に對する韋昭の注を引いて、

「招は、擧なり。舊音に曰く、招は音翹」といい(『漢

書』「陳勝傳」の贊も併せて引いている)、郭象注の當

該箇所について「其の非なるを知るべし」と斷じてい

る。『莊子』本文の解釋としては、俞樾の説を採るべ

きではあるが、郭象注の譯稿を行っている譯であるか

ら、ここでは郭象注に基づいて解釋した（俞樾『諸子平議』）。

なお、『淮南子』兵略篇にも「招義而責之」とあり、孫詒讓は「謂表楊（揭）仁義以爲準的也」とする。この訓は、羅勉道・王敬・宣穎らに知られており、俞樾が始めていいだしたのではない（池田知久『中国の古典』5 莊子上）。

(3) 三代 第42號307-4。「三代」は『莊子』「胠篋」篇・「在宥」篇にも現れている。池田知久氏は、「特に胠篋篇は、三代より以下を性命之情が失われた時代とみている點で駢拇に近い」と述べる（『中国の古典』5 莊子上）。

(4) 以物易其性矣…… これらはいずれも自己にとつて外的な「物」に従屬、「性を残さない性を損なう」點では同一次元のことであるとして、伯夷も盜跖も君子も小人も差剛はないとされる。

ところで名を是とし利を非とする見方や、仁義を君子に貨財を小人に結合する見方を呈示しているが、これは、「君子は世を没<sup>お</sup>えて、名稱せられざるを疾む」（『論語』衛靈公二十一）や「君子は義に喩り小人は利に

喩る」（『論語』里仁十六）等の考えと關係があり、儒家的な考え方をよく把握しているといえる。また利という極めて個人的なものから、名、家、天下とより廣範圍な全體的なことにかかわればかかわるほど、より價值ある人間とされるといふ見方は、「大學」の「修身・齊家・治國・平天下」の思想にも通ずるもので、究極最高の理想が天下にかかわる政治的なことであるとする儒家の基本的な考えを的確に把握しているといえる（澤田多喜男『東方宗教』第6號所收「駢拇以下四篇について」）。

(5) 聖人 聖人觀に關しては、「莊子」全篇の中で四篇は確かに特異である。四篇以外では或いは「聖人は則ち身を以て天下に殉ず」ることによって性を損なうものとされ（駢拇）、或いは「聖人に至るに及んで」仁義禮樂によって天下が亂れるが、それは「聖人の過ちだ」とされ（馬蹄）、或いは「跖も聖人の道を得ざれば行はれず」として、「聖人を掎撃する」ことによつて天下が治まるとされ（胠篋）、或いは「絶聖」といふことがいわれる（在宥）。そうして馬蹄篇では聖人が仁義と關連させられているように、駢拇篇では

虞舜が仁義と関連して説かれ、胙筐篇では聖人の道に

仁義があげられ、在宥篇では黄帝や堯舜仁義が関連して説かれているのを見ると、聖人批判は實は仁義批判と結合しているようである。しかも仁だけについては、「大仁は不仁」（齊物論五）や「至仁は親なし」（天運

二、庚桑楚十）などのように肯定的に扱われることもあるが、仁義と連稱される場合には、内篇と外雜篇とを問わず「莊子」全篇を通じて否定的に扱われているという事實からみると、四篇では聖人と仁義即ち世俗の價值觀とを結合している點に特色があるといえよう。聖人批判は、結局は世俗の價值觀の代表としての仁義批判ということに歸着する（澤田多喜男『東方宗教』第6號所收「駢拇以下四篇について」）。

(6) 臧與穀 臧獲。男の召使いと女の召使い。しもべ、奴婢（【釋文】）。

(7) 博塞 雙六・雙六をやる（【釋文】）。

(8) 伯夷 殷代孤竹君の子。弟の叔齊と跡繼ぎを譲り合って、位に就かなかつた。のちに周の武王が殷を滅ぼしたとき、周の穀物を食べるのを恥じ、首陽山に隠れて薇を食べていたが餓死したという（『史記』「伯夷

傳」）。

(9) 首陽 山名。伯夷・叔齊が餓死した場所。その所在については數説ある。

(10) 盜跖 春秋時代魯の人。一説に黄帝時代の人といい、秦代の人ともいう。千人の手下を従え、その横暴ぶりは目に餘った（『莊子』「盜跖篇」・「桀跖」第42號302-1）。

(11) 東陵 山名。山東省章丘縣の南に位置し、山の南に盜跖の墓がある。

### 【釋文】

「以撓」而小反。郭呼堯反、又許羔反。『廣雅』云、亂也。又奴爪反。

「性與」音餘。此可以意消息。後皆倣此。

「三代」夏殷周也。「以上」時掌反。「槃夷」並如字。謂創傷也。依字應作癩瘻。

「殉」辭俊反、徐辭倫反。司馬云、營也。崔云、殺身從之曰殉。「鶉」音純、又音敦。「穀」口豆反。「秃」吐木反。

「揮斥」上音揮、下音赤。

「臧」作郎反。崔云、好書曰臧。『方言』云、齊之北鄙、燕之北郊、凡民男而壻婢謂之臧、女而婦奴謂之獲。張揖云、

壻婢之子謂之臧、婦奴之子謂之獲。「與穀」如字。『爾雅』

二云、善也。崔本作穀、二云、孺子曰穀。「牧羊」牧養之牧。

「挾」音協。「筴」字又作策。初革反。李云、竹簡也。古以寫書、長二尺四寸。

「博塞」悉代反。塞、博之類也。漢書云、吾丘壽王以善格五待詔。謂博塞也。

「首陽」山名、在河東蒲坂縣。死、謂餓而死。「東陵」李云、謂泰山也。一云、陵名。今名東平陵、屬濟南郡。

### 《訓讀》

「以撓」は而小の反。郭は「呼堯の反、又許羔の反」と。

『廣雅』に云ふ、「亂なり」と。又奴爪の反。

「性與」は音餘。此れ意を以て消息すべし。後皆此れに倣へ。

「三代」は夏殷周なり。「以上」は時掌の反。「槃夷」は並びに字の如し。創傷を謂ふなり。字に依りて應に癩瘡に作るべし。

「殉」は辭俊の反、徐は「辭倫の反」と。司馬云ふ、「營なり」と。崔云ふ、「身を殺して之に従ふを殉と曰ふ」と。「鶉」は音純、又音敦。「穀」は口豆の反。「禿」は吐木の反。「揮斥」は上は音揮、下は音赤。

「臧」は作郎の反。崔云ふ、「書を好むを臧と曰ふ」と。

『方言』に云ふ、「齊の北鄙、燕の北郊にては、凡そ民男にして婢に壻たる之を臧と謂ひ、女にして奴に婦たる之を獲と謂ふ」と。張揖云ふ、「婢に壻たるの子之を臧と謂ひ、奴に婦たるの子之を獲と謂ふ」と。「與穀」は字のごとし。『爾雅』に云ふ、「善なり」と。崔本は穀に作りて、云ふ、「孺子を穀と曰ふ」と。「牧羊」は牧養の牧。「挾」は音協。「筴」の字は又策に作る。初革の反。李云ふ、「竹簡なり」と。古書を寫すには、長さ二尺四寸を以てす。

「博塞」は悉代の反。塞は、博の類なり。『漢書』に云ふ、「吾丘壽王格五を善くするを以て待詔たり」と。博塞を謂ふなり。

「首陽」は山の名、河東の蒲坂縣に在り。「死」とは、餓えて死するを謂ふ。「東陵」は李云ふ、「泰山を謂ふなり」と。一に云ふ、「陵の名」と。今東平陵と名づくるは、濟南郡に屬す。

「又惡」は音烏。「取君子小人於其間哉（君子小人を其の間に取らんや）」は崔本は「小人於」の三字無し。

### 【語釋】



(1) 槃夷 癩瘼。きず、きずあと。

(2) 『方言』 『揚子方言』。十三卷。漢の揚雄の撰。『論語』にまねて作ったもので、聖人を尊び王道を談じている。

(3) 張揖云 魏の張揖撰『廣雅』を指す。著書に『古今字詁』等があるがすでに散佚している。

(4) 『漢書』二云『漢書』は百卷。現行本は百二十卷。『史記』・『後漢書』と併せて三史と呼ばれる。後漢の班彪の志を繼いで子の班固が著し、妹の班昭が補って完成した。

『漢書』「列傳」卷六十四上「嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈傳」に「吾丘壽王字は子贛、趙人なり。年少くして、格五を善くするを以て待詔に召さる」とあり、蘇林の注には「博の類、箭を用ひず、但だ梟散を行ふのみ」とある。

(5) 「東陵」李云 『文選』「任彦昇王文憲集」の序「〔序〕の文字は、『新編諸子集成』の校によって補う」の注で引いている司馬注には、「東陵とは、陵名、今濟南に屬するなり」とあるが、『釋文』には載せていない(郭慶藩)。

【注】

夫東西易方、於體未虧。矜仁尙義、失其常然、以之死地、乃大惑也。

夫與物無傷者、非爲仁也、而仁迹行焉。令萬理皆當者、非爲義也、而義功見焉。故當而無傷者、非仁義之招也。然而天下奔馳、棄我徇彼以失其常然。故亂心不由於醜而恆在美色、撓世不由於惡而恆由仁義、則仁義者、撓天下之具也。雖虞氏無易之情、而天下之性固以易矣。

自三代以上、實有無爲之迹。無爲之迹、亦有爲者之所尙也、尙之則失其自然之素。故雖聖人有不得已。或以槃夷之事易垂拱之性。而況悠悠者哉。

夫鶉居而穀食、鳥行而無章者、何惜而不殉哉。故與世常冥、唯變所適、其迹則殉世之迹也。所遇者或時有槃夷禿脛之變、其迹則傷性之迹也。然而雖揮斥八極而神氣無變、手足槃夷而居形者不擾、則奚殉哉。無殉也。故乃不殉其所殉、而迹與世同殉也。

天下之所惜者生也。今殉之太甚、俱殘其生、則所殉是非、不足復論。

天下皆以不殘爲善、今均於殘生、則雖所殉不同、不足復計也。夫生奚爲殘、性奚爲易哉。皆由乎尙無爲之迹也。若

知迹之由乎無爲而成、則絕尙去甚而反冥我極矣。堯桀將均於自得、君子小人奚辨哉。

《訓讀》

夫れ東西 方を易ふるも、體に於ては未だ虧けず。仁に矜り義を尙んで、其の常然を失ひて以て死地に之くは、乃ち大惑なり。

夫れ物と與に傷つく無き者は、仁を爲すに非ざるなり。而して仁の迹行はる。萬理をして皆當たらしむる者は、義を爲すに非ざるなり。而して義の功見はる。故に當たりて傷つく無き者は、仁義の招もとむるに非ざるなり。然り而して天下奔馳し、我を棄て彼に徇ひて以て其の常然を失ふ。故に心を亂すは醜みにくに由らずして恆に美色に在り、世を撓よこすは惡に由らずして恆に仁義に由れば、則ち仁義なる者は、天下を撓すの具なり。

虞氏の易はる無きの情ありと雖も、而れども天下の性は固より以て易はる。

三代より以上は、實に無爲の迹有り。無爲の迹は、亦有爲の者の尙ぶ所なり。之を尙べば則ち其の自然の素を失ふ。故に聖人と雖も己むを得ざること有り、槃夷の事を以て垂拱の性に易ふること或り。而るを況んや悠悠たる者を

や。

夫れ鶉居して穀食し、鳥行して章はるること無き者は、何を惜しんで殉はざらんや。故に世と與に常に冥く、唯だ適く所に變ずるのみ、其の迹は則ち世に殉ふの迹なり。遇ふ所の者 或いは時に槃夷秃脛の變有り、其の迹は則ち性を傷ふの迹なり。然り而して八極を揮斥すと雖も而れども神氣變ずること無く、手足槃夷にして形に居る者の擾れざるときは、則ち奚ぞ殉はんや。殉ふ無きなり。故に乃ち其の殉ふ所に殉はず、而して迹 世ともと同一に殉ふなり。

天下の惜しむ所の者は生なり。今之に殉ふこと太だ甚だしくして、俱に其の生を殘へば、則ち殉ずる所の是非、復論ずるに足らず。

天下は皆殘はざるを以て善と爲せるに、今生を殘ふに均しければ、則ち殉ふ所同じからずと雖も、復計るに足らざるなり。夫れ生は奚爲れぞ殘ひ、性は奚爲れぞ易へんや。皆無爲の迹を尙ぶに由るなり。若し迹無爲に由りて成るを知れば、則ち尙を絶ち甚を去りて我が極に反かり冥る。堯桀すら將に自得に均しからんとす。君子と小人と奚ぞ辨ぜんや。

【譯文】

そもそも東と西の方角を取り違えても、體を損なうことはない。しかし仁に矜り義をたつとび、あるがままの本性を失って、極めて危険な状態に向かうのは、他でもない大きな戸惑いなのである。

そもそも萬物と一緒に（本性を）損なうことが無い者は、仁を（積極的に）爲そうとしないのに、仁の事迹は（自然と）行われる。あらゆる自然界の道理にすべてを向き合わせる者は、義を（積極的に）行おうとしないのに、義の功績は（自然と）現れる。だから向き合っていないのではないのである。しかし世の中の人々は驅けずりまわって、自分を顧みず仁のために一身を投げ出しあるがままの本性を失ってしまう。心を亂す原因は顔かたちの醜さによるのではなくいつも美しい顔かたちであり、世の中を混亂させる原因は悪によるのではなくいつも仁義によるということになると、仁義といったものは、世の中を混亂させる道具となるのである。

舜に變わらない心の作用があっても、世の中の人々の性質は本來變わるものである。

夏殷周より以前は、本當に作爲によらない自然の事迹

があった。作爲によらない自然の事迹は、作爲を勞する者が崇めたものでもあったが、無爲自然の姿を崇めると本來あるべき根本の姿を失ってしまう。だから聖人といえども仕方のないことがあり、ある時には傷つくことよって手をこまねくだけで何もしなくなってしまうことがある。そうであるならまして一般の世俗の者にとって（性を變えてしまうこと）は謂うまでもないことなのである。

そもそもうずらのように寢床を換え、ひな鳥が哺を受けるように與えられた物で満足し、鳥のように飛び立って足跡を残さないような者は、何を惜しんで自分の身を犠牲にしないことがあるか。世の移り變わりに従っていつも深遠な所に身を置き、ただ（一途に）身を處している場所で（自分を）變えていくだけであり、その事迹は世の移り變わりに身を捧げる事迹である。或る者は時に傷つき脛の毛がすり切れるほどの苦難に遭遇するが、その事迹は生命を損なう事迹である。しかし全世界をかけめぐっても靈妙な精氣は變わることは無く、手足が傷ついたまま肉體に留めている者が苦しむときには、どうして身を捧げるであろうか。身を捧げることなど無いのである。だからそこで其の身を捧げる對象に身を捧げず、事迹と世の移り變わ

りとに従って同時に身を捧げるのである。

世の中の人々が惜しむものは生命である。今生命を惜しまず追求しようというのは度を越したことであって、同時に其の生命を傷つけるならば、身を捧げることは是非は、ふたたび論じるまでもない。

世の中の人々は皆生命を損なわないことをよいことだとする。今どちらも等しく生命を損なっているので、身を捧げる対象が異なるからといって、(その優劣は) ふたたび考えるまでもない。いったい生命はどうして損なおうとし、生まれつきの性はどうして變わろうとするのだろうか。どちらも無爲の事迹をたつとぶことに由来するのである。もし事迹が無爲に由来して定まっていることが分かれば、むやみにたつとぶことを止め度を越したことを棄て去って我が身を振り返り自分自身の心の果てに思いをしずめる。堯や桀はどちらも等しく自得しようとしていたものであり、君子だ小人だとどうして分けられようか。

### 【語釋】

(1) 垂拱 衣をたれ、手をこまねく敬禮。手をこまねいて何もしないこと。

(2) 夫鶉居而穀食、鳥行而無章 「鶉居」はうずらの

寢床が定まらないように、住所が一定しないこと。

「穀食」は小鳥が母鳥に餌をもらうように、物に仰いで足りる喩え。生活が簡素であること。『莊子』「天地」篇に略々同文がある。

(3) 揮斥八極而神氣無變 八方の果て。八方は四方と四隅。東西南北、乾坤艮巽。八荒、八紘。轉じて全世界をいう。

『莊子』「田子方」篇に「八極に揮斥して神氣變ずる無し」とある。

## 7

### 【本文】

且夫屬其性乎仁義者、雖通如曾史、非吾所謂臧也。屬其性於五味、雖通如俞兒、非吾所謂臧也。屬其性乎五聲、雖通如師曠、非吾所謂聰也。屬其性乎五色、雖通如離朱、非吾所謂明也。吾所謂臧者、非仁義之謂也、臧於其德而已矣。吾所謂臧者、非所謂仁義之謂也、任其性命之情而已矣。吾所謂聰者、非謂其聞彼也、自聞而已矣。吾所謂明者、非謂其見彼也、自見而已矣。夫不自見而見彼、不自得而得彼者、是得人之得而不自得其得者也、適人之適而不自適其適

者也。夫適人之適而不自適其適、雖盜跖與伯夷、是同爲淫僻也。余愧乎道德。是以上不敢爲仁義之操、而下不敢爲淫僻之行也。

### 《訓讀》

且つ夫れ其の性を仁義に屬くる者は、通ずること曾史の如しと雖も、吾が謂ふ所の臧きに非ざるなり。其の性を五味に屬くるは、通ずること俞兒の如しと雖も、吾が謂ふ所の臧きに非ざるなり。其の性を五聲に屬くるは、通ずること師曠の如しと雖も、吾が謂ふ所の聰に非ざるなり。其の性を五色に屬くるは、通ずること離朱の如しと雖も、吾が謂ふ所の明に非ざるなり。吾が謂ふ所の臧きとは、仁義の謂に非ざるなり、其の徳を臧しとするのみ。吾が謂ふ所の臧きとは、謂ふ所の仁義の謂に非ざるなり、其の性命の情に任すのみ。吾が謂ふ所の聰とは、其の彼を聞くを謂ふに非ざるなり、自ら聞くのみ。吾が謂ふ所の明とは、其の彼を見るを謂ふに非ざるなり、自ら見るのみ。夫れ自ら見ずして彼を見、自ら得ずして彼を得る者は、是れ人の得を得として自ら其の得を得とせざる者なり、人の適を適として自ら其の適を適とせざる者なり。夫れ人の適を適として自ら其の適を適とせざるは、盜跖と伯夷と雖も、是れ同じく

淫僻と爲すなり。余道德に愧づ。是を以て上は敢へて仁義の操を爲さず、而して下は敢て淫僻の行ひを爲さざるなり。

### 《本文譯》

その上そもそも生まれつきの性を仁義に關係させる者は、曾參史鱈のように（仁義に）精通したといつても、私のいう臧よいことではない。生まれつきの性を五味に關係させる者は、俞兒のように（味覺に）精通したといつても、私のいう臧いことではない。生まれつきの性を五聲に關係させる者は、師曠のように（音樂に）精通したといつても、私のいう耳が臧いことではない。生まれつきの性を五色に關係させる者は、離朱のように（視覺に）精通したといつても、私のいう目が臧いことではない。私のいう臧いこととは、仁義の意味ではなく、自然な持ち前を臧いことだとするだけである。私のいう臧いこととは、世間で言われているような仁義の意味ではなく、生まれつきの性命の本性に任せることにすぎない。私のいう耳が臧いこととは、外物の音を聞き分けることをいうのではなく、自分自身の聲を聞くことにすぎない。私のいう目が臧いこととは、外物を見分けることをいうのではなく、自分自身の姿を見ること

にすぎない。そもそも自分自身の姿を見ようとせず、外物

(第42號298—1)。

を見、自分自身を獲得できないまま外物を手に入れようとする者は、他人の得たものを自分が獲得したものとして自分から得るべきものを得ようとし、他人の樂しみを自分の樂しみとして自分から樂しむべきものを樂しもうとしない者である。いったい他人の樂しみを自分の樂しみとして自分から樂しむべきものを樂しもうとしない者は、たとえ盜跖(ただでなく、清廉の譽れ高い)伯夷であっても、どちらも同じく過度に偏っているといふべきである。私は道徳に氣がとがめる。そこで背伸びをしてみだりに仁義の氣風を身に付けようとはせず、身を落としてむやみに過度に偏った行いをしないのである。

【語釋】

(1) 屬 係屬。くつつけること(【釋文】)。

(2) 五味 鹹・苦・酸・辛・甘の五種類の味。

(3) 俞兒 黃帝の時の味を良く理解した料理人。

(4) 五聲 五音(宮・商・角・徵・羽)。第42號298—5

(5) 師曠 春秋時代の晉の樂師。字は子野、耳さとく、

良く音階を聞き分け、音によって吉凶を占った。

(6) 五色 五采。青・黃・赤・白・黒の五種類の色

(7) 自見 自分の天性を省察すること。『老子』に

「人を知るものは智なるも、自ら知る者は明らかなり。人に勝つ者は力あるも、自ら勝つ者は強し。足るを知る者は富み、強め行ふ者は志あり。その所を失はざる者は久しく、死して亡びざるものは壽し」とあるのと相通ずる主張(赤塚忠『全釈漢文体系』16莊子上)。

(8) 「適人之適而不自適其適者也」 『莊子』内篇の

「大宗師」に同文を載せている。

(9) 淫僻 淫僻。よこしま。過度に偏る。

【釋文】

「屬其」郭時欲反、謂係屬也。徐音燭、屬著也。下皆同。

「雖通如楊墨」一本無此句。「俞兒」音榆、李式榆反。司馬

云、古之善識味人也。崔云、「尸子」曰、膳俞兒和之以薑

桂、爲人主上食。『淮南』云、俞兒狄牙、嘗淄澠之水而別

之。一云、俞兒、黃帝時人。狄牙則易牙、齊桓公時識味人

也。一云、俞兒亦齊人。『淮南子』一本作申兒、疑申當爲

與。

「不累」劣僞反。後皆倣此。

「舍己」音捨。

「愧乎」崔本作魄、云、魄、愧同。「之行」下孟反。注同。

「冥復」音服。「從容」七容反。「吹」如字、又昌僞反。字亦作炊。

### 《訓讀》

「屬其」は郭は「時欲の反、係屬を謂ふなり」と。徐は「音燭、屬は著くなり」と。下皆同じ。

「雖通如楊墨」は一本此の句無し。「俞兒」は音榆、李は「式榆の反」と。司馬云ふ、「古の善く味を識る人なり」と。崔云ふ、「『尸子』に曰く、『膳俞兒之に和するに薑桂を以てし、人主の爲に上食す』と。『淮南』に云ふ、『俞兒狄牙、淄澗の水を嘗めて之を別つ』と。一に云ふ、

『俞兒は、黃帝の時の人』と。狄牙は則ち易牙、齊の桓公の時の味を識る人なり」と。一に云ふ、『俞兒も亦齊人』と。『淮南子』は一本申兒に作る、疑ふらくは申は當に與と爲すべし」と。

「不累」は劣僞の反。後皆此れに倣へ。

「舍己」は音捨。

「愧乎」は崔本は魄に作りて、云ふ、「魄・愧同じ」と。

「之行」は下孟の反。注同じ。「冥復」は音服。「從容」は七容の反。「吹」は字の如し、又昌僞の反。字亦炊に作

る。

### 【語釋】

(1) 一本無此句 現行本『莊子』には見られない。

(2) 『尸子』曰、「膳俞兒……」 『尸子』は書名。二卷。

尸佼の撰。内容は名家・法家に近い。『漢書』『藝文志』は雜家に入れる。もともと二十卷あったが散佚し、現行本は後に清の章宗源が集成し、孫星衍が補訂したものである。なお、現行本『尸子』には、「膳」の文字はない。

(3) 薑桂 生姜と肉桂。どちらも料理の味を調えるもの。

(4) 『淮南』云、「俞兒……」 『淮南子』、書名。前漢の淮南王劉安の撰。『漢書』『藝文志』は雜家に收め、内二十一篇・外三十三篇とあるが、現存するのは二十一篇である。

陸徳明が何に據ったのかははっきりしないが、現行本『淮南子』「汜論訓」には「俞兒狄牙は、淄澗の水の合ふ者も、一哈の水を嘗めて甘苦を知る」とある。

(5) 狄牙 易牙(狄は易に通じる)。滋味に精通した桓公の宦者。桓公の死後齊を亂した。『管子』・『韓非

子』等は、桓公の寵愛を得るために自分の子を料理して出した話を載せている。

(6) 淄澗 山東省にある二つの川の名。淄水と澗水。

(7) 黃帝 古の帝王、三皇の一人。姓は公孫、軒轅の丘に生まれたので、軒轅氏という。蒼頡を史官として、六書を制し、律呂を定め、五音を和し、曆・算數を作らせたとされる。

(8) 齊桓公 五霸の一人。鮑叔牙の薦めによって管仲を任命し、霸業を成した。

(9) 一云 成玄英の「疏」に「孟子云ふ、『兪兒は、齊の味を識る人なり』とあるが現行本には見えない。

### 【注】

以此係彼爲屬。屬性於仁、殉仁者耳。故不善也。

率性通味乃善。

不付之於我而屬之於彼、則雖通之如彼、而我已喪矣。故各任其耳目之用、而不係於離曠、乃聰明也。

善於自得、忘仁而仁。

謂仁義爲善、則損身以殉之。此於性命還自不仁也。身且不仁、其如人何。故任其性命、乃能及人、及人而不累於己、彼我同於自得、斯可謂善也。

夫絶離棄曠、自任聞見、則萬方之聰明莫不皆全也。此舍己效人者也。雖效之若人、而已已亡矣。

苟以失性爲淫僻、則雖所失之塗異、其於失之一也。

愧道德之不爲、謝冥復之無迹。故絶操行、忘名利、從容吹累、遺我忘彼。若斯而已矣。

### 《訓讀》

此れを以て彼に係くるを屬と爲す。性を仁に屬くるは、仁に殉ふ者のみ。故に不善なり。

性に率ひて味に通ずるは乃ち善なり。

之を我に付せずして之を彼に屬くるは、則ち之に通ずること彼の如しと雖も、而れども我已に喪ふ。故に各おの其の耳目の用に任せて、離曠に係けざるは、乃ち聰明なり。

自得に善きは、仁を忘れて仁なり。

仁義を謂ひて善と爲せば、則ち身を損なひて以て之に殉ふ。此れ性命に於て還た自ら不仁なり。身すら且つ仁ならず、其れ人を如何せん。故に其の性命に任せて、乃ち能く人に及ぼし、人に及ぼして己に累はさず、彼我自得に同じきは、斯ち善と謂ふべきなり。

夫れ離を絶ち曠を棄て、自ら聞見に任すときは、則ち萬方の聰明皆全ならざるは莫きなり。



此れ己を捨てて人に效ふ者なり。之に效ふこと人の若しと雖も、己己に亡べり。

苟も性を失ふを以て淫僻と爲さば、則ち失ふ所の塗異なると雖も、其の之を失ふに於ては一なり。

道德の爲さざるを愧ぢ、冥復の迹無きを謝す。故に操行を絶ち、名利を忘れ、従容吹累して、我を遣れ彼を忘る。斯くの若くするのみ。

### 【譯文】

生まれつきの性を仁義に關係させることを屬という。生まれつきの性を仁に關係させるのは、仁に身を捧げる者だけである。だからよくないことなのである。

生まれつきの性につきしたがって味に精通するのは他ならぬよいことである。

生まれつきの性を自分に關係させるのではなく外物に關係させるものは、師曠や離朱のように味覺や音樂に精通したといつても、しかし自身の生まれつきの性はもはや喪われてしまっている。だからそれぞれが自分の耳や目の作用に任せて、離朱や師曠に關係させないのは、他ならぬ耳がよいことや目がよいことである。

自得をうまく行えるものは、仁を自覺しなくてもそれは

仁なのである。

仁義を善と思えば、自分の身を損って仁義に身を捧げている。これは性命に對してかえって自然に不仁をなしているのである。我が身でさえも仁ではないのだから、いったい他人をどうしようというのであろうか。だからあるがままの性命に任せて、そうして他人に影響を及ぼし、他人に影響を及ぼして自分自身を煩わさず、他人も自分自身も生まれつきの性を自得に同化するの、巧みに行うというべきである。

いったい離朱を絶ち切り師曠を棄て去り、自分自身が目にしたり耳にしたりするままに任せるときには、あらゆる方面の物を見通す能力はすべて完全でないものはない。

これは自分自身を棄てて他人に見習おうとする者である。他人のように得たものを見習おうとしても、自分自身はすでに無くなってしまっている。

かりに生まれつきの性を失うことによつて過度に偏るならば、失つた道筋は異なっているといつても、生まれつきの性を失う點では同じである。

道德が行われないことを恥ずかしく思い、心の奥深い世界で實踐された事迹が無いことを詫び、そこで仰々しい

行いを絶ち切り、名譽や利心を忘れ、ゆったりとほこりが舞うように、自分自身を棄て外物をも忘れ去る。こうした境地に身を置くだけである。

【語釋】

(1) 已 現行本は「己」に作るが、「已」の誤りであろう(劉文典『莊子補正』は「已」に作る)。

(2) 操行 おこない。みもち。品行。素行。

(3) 名利 名譽と利益。功名と利祿。

(4) 炊累 炊累。ほこりが舞い上がる様。『莊子』「在宥」篇に「其の聰明を擢くこと无ければ、尸居して龍見し、淵黙して雷聲し、神動して天隨し、從容无爲にして萬物炊累す」とある。